

夢 塾 だ よ り

～ 最後まであきらめない ～

(第48号) 令和3年7月27日



東京2020 コロナ禍の中、無観客での開催となりました。開催への不安は隠せなかったのですが、TVで見ることができました。県勢では早くも、久高島出身の糸数選手が4位入賞を果たしました。母子家庭の6人兄弟の長男で常に沖縄の家族を気にかけて苦しい家計を心配し、大

学入学はもらい物のジャケットですませました。

糸数選手が重量挙げを始めたのは、中学時代。豊見城高校に進んで平日は先輩の自宅に寝泊まりし、週末に南城市の実家に帰る生活。母親の幸子さんは試合の朝にはいつも愛情一杯のポーク卵を持たせ送り出しました。警視庁に入り、初任給で幸子さんに30万の中古車を買ってあげました。競技後糸数選手は「メダルを見せてあげたかった。恩を返すことができず悔やまれる」と。世界を相手に2度の大舞台で活躍した彼は、母がつけた「陽一」に込められた「太陽のように輝いてほしい」という思いを実現させたのです。陽一少年の類まれなる才能を見出した名伯楽・豊見城高校の大湾朝民先生の存在も忘れてはなりません。いい「出会い」が人生を変えるのです。

私は、たまたま卓球の混合ダブルス、準々決勝を見たのですが、3-3のフルセットの末、ドイツに5-0でリードされ、最大7点差(9-2)まで追い詰められ、何度も何度も相手のマッチポイントの場面をしのいで交わして、大逆転勝利。その試合後に美誠選手は、「水谷さんだから勝てた」と話したのが印象に残ります。



そして準決勝では台湾をやぶり、決勝では無敵の中国をフルセットの末に破り、初の金メダルに輝きました。金が決まった後のインタビューで伊藤美誠さんの言葉です。「最後まであきらめずにできたので、すごく楽しかったです」

「最後まであきらめない」・・・口で言うのは簡単ですが、その道のりの厳しさは体験した人しかわかりません。でもこの気持ちだけは、何事をなすにも、絶えず持ち続けたいと思います。